

害虫発生概況

ニカメイガ越冬幼虫の春期における発育は著しく長期低温であつたためか、平年より著しく遅れ、6月に入つて発育は急速に進んだにもかかわらず、発蛾最盛期は約4～14日遅れた所が多かつた。また後期発蛾が著しく遅れてしかも多発した場所があり、それが発蛾最盛期の連続した豪雨による薬剤散布の困難性と相まつてかなりの被害を出した地域もあつた。しかし発蛾量は平年並みないしやや多で、防除は一般に順調におこなわれたため被害は少なかつた。第2回発蛾期は全般的に平年よりやや遅く、量は北九州では並みないしやや少で、南九州では平年並みないしやや多であり防除もかなりよくおこなわれたので、被害は一部を除き少なかつた。

サンカメイチュウの南九州における発生被害は近年増大して行く傾向にあり、本年度も発生面積・量とも昨年を上まわる状態ではたびたび実施された薬剤防除にもかかわらず、かなりの被害を出した。また今年は宮崎・鹿児島・大分の他長崎の一部に局部的な多発をみた。本種による被害は、作付体系の多岐複雑化に伴つて、今後ますます増大する危険を含んでいるものと考えられる。

アヲトウは佐賀・熊本で局部的に発生をみたが、大きな被害を招くにはいたらなかつた。コブノメイガ、タテハマキ、イネアオムシ、イネツトムシなどの鱗翅目害虫の発生はやや多かつたが、ニカメイチュウ防除によつて併殺され、ひどい被害は現われなかつた。

ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイの越冬密度及びその後の発生は多く、その傾向は特に前者で顕著であつたので、ウイルス病の多発が懸念された。そのためヘリコプター防除や地上散布が効果的に実施された所が多く、このような地域では大きな被害を見ずに終つた。すなわちヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイの発生量にくらべて稲縞葉枯病、稲萎縮病の発生は比較的少なかつた。しかし稲萎縮病の発生は南九州のみにとどまらずその分布発生面積は九州全土に拡大した。また黒茶萎縮病は福岡・宮崎で局部的にかなりの被害を出した。

セジロウンカ、トビイロウンカの飛来侵入虫は少なく、その上気温が幾分低かつたためその後の増殖も著しくなく、更にニカメイチュウの防除によつて併殺さ

れ、被害は平年に比較して非常に少なかつた。

イネカラバエは山間地方に発生して傷穂を生じた場所もあつたが、一般には少なかつた。佐賀の水害地の一部にイネクロカラバエの多発をみた。ミナミアオカメムシの宮崎における発生は少なかつたが鹿児島にも分布していることが確認された。クロカメムシの発生が各地でみられたが特に太平洋岸にそつた地方で局部的に多発し、かなりの被害をみた。

麦作においてはトビムシモドキの加害が北九州の各地で目立つたほかはキリウジ、ハリガネムシなどの被害には特に顕著な特徴はみとめられなかつた。ナカシロシタバが宮崎で著しく発生したが、鹿児島ではむしろ少なかつた。また長崎でも本種による甘藷の被害が目立つた。しかし、イモヒナガの集団発生による被害が鹿児島県さつま半島南部にみられた。長崎においてはジャガイモガの秋馬鈴薯に対する加害が局部的に発生した。ハスモンヨトウが単独またはイモコガなどと混発して局部的に被害を与えた所もあつたが、一般にアブラムシ類の発生も少なく、畑作物の虫害は少ない年であつた。

果樹に関してはヤノネカイガラが全般的にやや少ない傾向を示したが、ミカン・柿・ぶどう・梨・桃・茶の他の害虫においては一般に平年並みの発生経過を示した。ただキクイムシによる柑橘の加害が、従来知られていた福岡以外に宮崎においても確認されたことは注目され、またブドウのヒメヨコバイ1種にスズキヒメヨコバイの発生加害が北九州で確認され注目された。

病害発生概況

麦類の病害は全般に発生がおくれ、程度もはなはだ軽かつた。これは冬から春早春にかけて低温であつたためと考えられ、ウドンコ病、サビ病類は各県とも少なかつた。アカカビ病も裸麦では開花期ころが乾燥していたので、平年より少なかつたが、小麦では佐賀、長崎の収納のおくれたところで雨のため被害がやや多かつた。また、大麦シマイシユク病の発生が長崎、熊本で目だつた。

菜種の病害の発生もおくれて、キンカク病、シラサビ病など少発長に終わつた。春作馬鈴薯のエキ病は蔓延期の多雨で長崎、宮崎の両産地ともやや発生した。

稲の病害では、6月上～中旬の低温日照不足と、それに続いた6月下旬～7月中旬の低温多雨で、早期作

では葉イモチ、普通作では苗および葉イモチが各県ともに多発し、とくに山間部で激しかった。従つて、イモチ用の水銀剤は前半期に例年より多く使われた。しかし、出穂期の天候が曇天多湿で穂イモチの発生がやや多かつたにもかかわらず、後になつて天候が好転して、後期の発生は少なくなり、被害は予想されたよりも軽かつた。モンガレ病は南九州の早期作では梅雨が長びいたためにやや多かつたが、普通作では各県とも被害が軽かつた。これは初期の低温とそれによる稲の生育のおくれによつて初発生が例年よりおそかつたのと、稲株の繁茂が蔓延期よりずれたためと考えられる。シラハガレ病は早期作では鹿児島でやや多かつた以外は少発生であつた。普通作では苗代末期～本田初期の豪雨による浸冠水で初期感染が広範囲に行なわれ、近年では目だつ多発生となつた。しかし、成熟期の好天気と低温の早い到来に加えて台風がなかつたことにより、蔓延は緩やかで発生面積の大きい割には被害は比較的軽いものが多かつた。

ウィルス病類のうちで、イシユク病は媒介昆虫のツマグロヨコバイの発生がおくれたためか宮崎、鹿児島、鹿兒島の普通作でやや多かつたほかは、全般に被害が軽かつた。しかし、シマハガレ病は媒介昆虫のヒメトビウンカの発生がやはりおくれたにもかかわらず、各県とも多発生であり、とくに中部以北の県の準早期～早植栽培ではなはだしかった。オウイ病は発生程度はまだひどくないが、北部九州の各県にも発生がみられ、かえつて例年発生の多い宮崎では前年より少なくなつた。これは積極的に広域防除が実施されたことも、大いに影響したと思われる。クロスジイシユク病は宮崎の中期作に多かつたほか、2～3の県にも発生が認められた。その他の病害では、集中豪雨のため浸冠水の起こつた中部以北の各県でオウカイイシユク病がやや多かつたのと、後期にゴマハカレ病および変色穂の発生が多目であつた。

新病害ではトマトのカイヨウ病が初めて福岡で発見されたことが注目される。

水 稲 (普通栽培)

梅雨明けがおくれたため、分けつゝの発生が不良で、草丈は徒長気味となり、初期の作柄は悲観的であつたが、8月中旬以降天候がおおむね平年並みに回復したため、穂の伸長は順調で出穂期を迎えた。

登熟期間は晝間高温多照、夜温は低めで気温較差が

大きく、登熟には好適で、この間台風が九州には全然こなかつた。このため穂の色は近年にない見事な熟れ色を呈し、粒の充実がよく、一穂からとれる収量が多くなつて、北九州の福岡・佐賀・長崎三県では史上最高の作柄を記録し、九州全体では最豊作の昭和33年に僅かに及ばなかつた。

このように本年の作柄は尻上がり好転して意外の豊作をもたらしたが、作柄要因からみて、密植化による穂数の確保は、天候を克服して豊作の基礎をつくつた点、技術効果は大きく評価されよう。

麦 類

発芽並びに初期生育は高温によつて促進され、年内に分けつゝの発生を見、1月の低温によつて草丈の伸長は抑制され、莖数の増加は順調で、最高分けつ期の莖数ではやや過剰気味であつた。穂数はこのため平年より1～2割の増加となり、一穂の稔実粒数も多く、出穂期は1週間くらいおくれたが、その後も低温に経過したので登熟も徐々に進行し、多照(寡雨)のため後期まで粒の充実が続いたので、登熟は全般に良好であつた。このため収量は北部九州では近年の最豊作となつたが、南部では収穫期近くなつて雨が多く、赤カビ病の発生をみたので北部ほど多収ではなかつた。

陸 稻

南九州では播種から生育の初期は低温で生育は必ずしもよくなく、中期には日照不足と長雨により肥料の流亡があつて葉色もあせ、肥料切れの様相を呈し、干ばつや台風の災害はなかつたにもかかわらず、収量は平年作がそれを下まわるものであつた。

阿蘇では初期低温で発芽がおくれ、その後中期、日照不足と多雨のため軟弱徒長気味となり出穂期は数日おくれ、収量は穂数の増加により多収となつたが、品質は倒伏のためわずかによくなかつた。

甘 藷

育苗期間中は、平年にくらべ降水量、日照時間は大差なかつたが、気温が低かつたので、苗の伸長はやや遅れた。植え付け時の気温はやや低かつたが降水量、日照は適当にあつたので、活着は良好であつた。しかしその後各地ともまれに見る長雨で、初期生育は著しく阻害された。中期の生育は平年と大差なく経過した。9月中旬以降は各地とも気温高く、降水量少な

く、日照が多かつたので、塊根の肥大は著しく促進され、初期生育の遅れをとりもどすかにみえたが、例年より20日程度も早い10月15～16日の強い初霜で、南九州、天草、長崎の一部を除き茎葉が黒変した。その後好天が続いたが、地上部が枯死したものはよくなかつた。台風の影響はなかつたが、虫害はかなりあつた。

作柄は初期生育の不良と早すぎた強い初霜のため、収量は平年作程度となり、澱粉歩留りは低かつた。

馬鈴薯

春作

全生育期間を通じて気温はやや低目に経過し、降水量は4月中～5月上旬は少なく、日照はやや多い日で、その生育はほぼ順調であつたが、6月中旬に降雨が続いたため収穫がおくれて、いも収量は平年より多かつたが若干腐敗いもの発生をみた。

秋作

気温は平年と大差なく経過し、日照は生育の前・中期は多く、後期は少なかつた。生育は全般的に順調でいも収量は平年並かやや多い程度であつた。

大豆

夏大豆では播種期が低温に経過したため、発芽がおくれたところもあるが大した支障はなかつた。その後は日照少なく曇雨天が多かつたので、生育中期の開花期ころまで生育がわるく、特に草丈、分枝の伸びが不良で軟弱となり（北九州）、所によつては徒長気味となり、開花期の多雨で稔実不良がみられ（南九州）、8月中旬の多雨で早生種に腐敗粒が多く（佐賀）、品質収量とも平年にくらべて不良であつた。

秋大豆では秋冷が早く霜害がきびしかつたので、カメムシの被害とあいまつて、着莢稔実が劣り小粒で少収に終わった。

なたね (36年度播)

播種期の9月上旬には少雨多照で、早播のものに多少発芽不良がみられたが、その後播種のもは概して順調な降雨があつたため、発芽は良好であつた。

定植時は天候順調にして活着は良好であつたが、12月下旬以降の寒波と少雨のため、生育は遅延した。従つて抽苔期は15日前後、開花期は6～8日遅れた。しかし発熟期間は気温もおおむね平年並みになり、生育はやや良くなつた。成熟期はごく早生～早生種が5～

7日、中生種が3～4日遅れた。刈り取り、乾燥時はやや天候不順のため、一部に発芽、脱粒がみられた（主に南九州）。

病虫害の発生については菌核病は平年並みかそれ以下であり、その他の病虫害の発生も比較的少なかつたので収量は平年を上まわつた。

飼料作物、家畜

昭和37年の冬から春にかけては低温で、降水量がすくなかつたが、4月は降水量はきわめて多かつた。このことは牧草の生育には好都合であり、適当な刈り取り利用を行なつた場合には被害がなかつた。しかし、実取り、あるいは乾草用の牧草は倒伏し、それにとまなう腐敗などのため被害が大きかつた。それに反して5月は乾燥し、夏作飼料作物の播種に影響した。

果樹

1～2月の寒さは大したこともなかつたが、3～4月に晩霜や降雪があり、春の寒さに最も敏感なビワの幼果が寒害をうけ、枯死するもの多く、相当な減収となつた。ナシは開花期の低温により実止り悪く、また4月には所によりかなり激しい降雪があり、福岡県の一部栽培地では大打撃をうけた。ブドウは開花期の好天候により実止まりよく、前年に比べ大豊作であつた。ミカン類は花着きよく当初大豊作が予想されたが、その後梅雨期前後の長期多雨により落果を見、かなりの訂正を必要とされた。しかし結局は平年を遙かに上回る豊作であつた。またミカン苗木接木時期に（4月上旬）に低温であつたため活着が不良であり、その後接ぎ換えなどにより生育不良となり、減収であつた。カキは前年の台風18号により、かなりひどい潮風害をうけた影響が残り、あまり好成绩ではなかつた。

そ 菜

37年は晩い春は始まり、梅雨季には激しい集中豪雨に見舞われ、順調な年のスタートではなかつたが、春作のハウスのキュウリ、トマトなど果菜類は育苗期、定植期の苦勞を克服してどうにか平年作に近い収穫をみたが、ボトリチス、菌核病の発生が多くみられた。また半促イチゴのとくに紅鶴を作付けている地帯は、低温による奇形果が多発した。

さらにトンネル早熟果菜は豪雨による直接被害、多雨、少日照による疫病などの多発により、かなりの減

収を来たし、とくに十字花科野菜は穂発芽も伴って著しく減収した。

梅雨明け盛夏季以降は比較的順調で、台風も大きいものはなく、秋冬作は平年作を示した。

花 き

冬季低温のため唐津・天草大矢野島などの冬出しキンセンカ、ヤグルマソウ、鹿児島県山川の冬出しアイリス、グラデオラスなどは寒害のため切花本数が減少し、品質が低下し、甚しいものは収獲が得られなかつた。また八女市を主産地とする抑制ギク、糸島のピニール栽培のキンギョソウ、抑制ギク、熊本市田迎町のカラー、カーネーションなどでは積雪のためハウスの倒伏が少なくなかつた。

夏季多湿或は高温のため秋菊は露地、抑制とも活着が不良であつた。輸出向け球根アイリスは、収穫期の多雨のため収穫期以降に球根腐敗の多発した地帯があつた。

茶

(1) 一番茶

九州地方は全般に冬期間の乾燥、3～4月の低温と

雨量不足のため、発芽は不そろいとなり、摘採期は7～10日おくれた。しかしその後の気象が順調であり、肥培管理もよく行なわれたので、晩霜の被害をうけた一部の地域を除き増収した。

(2) 二番茶

気温は低目であつたが、降水量が多かつたため、発芽伸育は順調に進んだ。しかし一番茶期の凍霜害の影響で芽立ちは不そろいとなり、長雨のため摘採期がおくれた。

(3) 三番茶

摘採期は一、二番茶の影響でおくれたが、気象条件にめぐまれ、伸育は順調で、いずれも増収した。

(4) 総括

全国的にみると主産地の静岡県が36年秋の潮風害のため、一、二番茶を通じて発芽生育が悪かつたことと、冬期および夏期の乾燥のため4.8%の減収あつた。これに対して九州地方は長崎県を除き良好で、年間合計6.4%の増収を示した。

また価格は端境期における在庫が払底したため、一番茶が約20%の高値となり、年間平均で前年の14%高であつた。